

2019年3月17日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「富める者と貧しき者」

聖書：ルカによる福音書16:19～31

私たちの社会は、相も変わらず富める者はより豊かに、貧しき者はさらに貧しくされる社会がまかり通っている。このような社会を神はどう見ておられるのか？また、私たちはどう見ているのか？教会はどうか？

「金持ちとラザロ」の話は、可能な限り対照的な裕福な者と貧しい者を現している。この世では金が有るか無いかで不平等な世界がつくられている。しかし「死」は金が有る無しに関係なく平等に迎えるもの。この物語では、死後の世界では貧しき者は慰めを受け、富める者は苦しみを受けるという形勢逆転が記されている。死後の世界は決して平等ではないと記す。この金持ちの関心ごとは、あくまでも自分たちの兄弟のことで、死後の世界でも豊かに暮らせるような道筋を願っている。この金持ちにはラザロのような貧しい者への視点はまったくない。

この物語はたとえ話である。キリスト教的な死後の世界の説明ではない。私たちはこの物語を地獄に落ちないために、聖書の言葉に、牧師の言葉に耳を傾けて行かなければならないという教えとして聞いてこなかったか？

ルカ福音書は、死後の世界のことを記そうとしたのではなく、この世の現実社会を風刺的に記したのではないか。この世の社会はいつの時代も富める者はなお豊かになり、貧しき者はいつまで経っても貧しいままにある。それは、力ある金持ちが、死後の世界においてもなお自分たちの豊かさだけを追い求めているからで(16:27-28)、これは強烈な皮肉である。金持ちは、財力を我が物とし、その金は身内のみ、仲間のみ、国家のみで使いまわそうとする。自分たちだけが豊かであればそれでいいという考えは、これはもう神の目から見れば、死者の状態であり、死後の世界を現すかのように映るということ。貧しい者が門前払いされる社会、犬になめられるような屈辱的な社会に憤りをもってこのルカ福音書は記されているということであろうかと思う。(神谷)